

クロチャンどいへ?

クロチャン、ご苦労さま。昭和六十一年以来、北上市へ十八年連続して飛来し、記録を更新し続けてきたアメリカコハクチョウの「クロチャン」が、今冬は姿を見せず、寿命を迎えたのではないかと推測されている。初飛来から見守ってきた日本白鳥の会会員の村瀬美江さん(同市常盤台)は「クロチャン、ありがとう。ゆっくり休んでください」と、アメリカコハクチョウの生息を知る貴重な記録を残したクロチャンに感謝している。



クロチャン(手前左)とカアサン(同右) 16年3月、村瀬美江さん撮影

北上 今冬、いまだ姿見せず

昭和61年以来、18年連続で飛来

クロチャンはアメリカコハクチョウの雄。アメリカコハクチョウは、オオハクチョウと比べて小柄で、真っ黒なくちばし(嘴)が特徴。国内への飛来そのものが珍しく、平均寿命は七、八年とされるハクチョウだが、クロチャンの場合は、この定説を覆し、昨冬まで十八年間(一地点で観察されている)にわたり、市内のほぼ同一地点で観察されている貴重な事例として、専門家にも知られている。

クロチャンは昭和六十一年三月に初めて飛来。同年十月に再び飛来した際、コハクチョウの雌「カアサン」とつがいに成り、翌年から毎年のように幼鳥を連れて飛来した。昨冬は十五年十二月三日に一羽だけで飛来した後、一時行方不明となったが、同二十六日にカアサン、幼鳥一羽と再び姿を見せ、十六年四月十八日に北帰行へ旅立った。

とわの別れも覚悟

見守り続けた 村瀬美江さん 貴重な思い出に感謝



資料を前にクロチャンについて語る村瀬美江さん

七羽に上っている。定説を覆し、長寿として知られたクロチャン。「ここ四、五年は高齢のためか慎重さが欠けて、子育てをカアサンに任せきりだった。北帰行の際は『息を吐いて帰るのよ』と、体力も心配しながら見送っていました」と話す美江さんも、別れは覚悟していた様子。

「クロチャンを外孫の選んだ同市相去町の大堤や新堤を取り巻く環境は開発などで年々悪化していったが、村瀬さんが夫の故正夫さんをほじめ、愛鳥家と餌づけを続けしてきたことから、「人とのつながりがあるからこそ、欠かさずにやってくる」と振返る。

クロチャンとカアサンをほじめ、その子供、孫、ひ孫、やじやを合わせたクロチャン一族は、市内で確認されただけで二百二十一羽(十四日現在)。内訳は子供五十二羽、孫七十三羽、ひ孫七十羽、やじや七羽、それに子供や孫とつがいに成ったアメリカコハクチョウやコハクチョウが十

ロチャンの子供や孫も北上市に飛来しているのだから、これからの楽しみに観察を続けます。カアサンは体力もあるので、どこかで生きていると思うのですが」と、クロチャンと同様に姿を見せないカアサンを含め、これからも一族の観察を続けていくという。

アメリカコハクチョウは、その名の通り米國で繁殖。主にアラソカやグリーンランドだが、一部がベーリング海峡などで繁殖し、このうちの数羽が国内に飛来するとみられている。ほぼ同一地点に連続飛来して越冬し、やじやごまで確認されている例はクロチャン以外

にない。

クロチャンが、これまでに最も遅く飛来したのは平成元年十二月八日。年を越してからの飛来は前例がないものの、ひょっこり現れてくれるのではないかと、希望も、美江さんは捨ててはいない。「餌をやる人が少ない吹雪の日こそ出掛けたくなるんです」。降っても晴れても飛来地へと足